第23回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

特選　金融担当大臣賞

税金という名の顕微鏡

石川県・金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校　2年　橘　葵衣

私は理科が嫌いだった。数字と用語の羅列は、砂を噛むように味気ないものだった。公式や用語を覚えれば点数は取れるのだからそこにどんな意味があるのか考えようともしなかった。テスト勉強はただの作業で、学びとは退屈なものだと思っていた。

そんな私に転機が訪れたのは中学のある日だった。友人が市の科学教室の案内を見せてきて、「一緒に行こう」と声をかけてきたのだ。無料ならまあいいかと、私は渋々腰を上げた。

科学教室には、ふだん学校で使う簡易顕微鏡とは違う、研究室レベルの高倍率顕微鏡が用意されていた。レンズ越しに現れたのは、透明な殻に細かい模様をまとった珪藻だった。まるでガラス細工のような精巧さで、水滴の中を漂っていた。教科書の小さな図では味わえない立体感に、私は息をのんだ。見えなかったものが像を結ぶ瞬間に、学問の面白さは宿っていた。

そもそも私がその場に足を運べたのは、市の事業として無料で開かれていたからだ。母子家庭の我が家では、習い事の月謝を払う余裕もなく、学外の教室に通った経験はほとんどなかった。もしこの科学教室が月謝制だったなら、友人の誘いにうなずくことはきっとなかっただろう。無料であることが、重かった足をほんの少し軽くしてくれた。税金が、私と理科の面白さとの出会いを可能にしてくれたのである。

こうして学びの楽しさに気づいた私は、税によって支えられる教育の意味を考えるようになった。教育は「消費」ではなく「投資」である。政府は義務教育費国庫負担制度を通じて教員給与の一部を国が負担し、地方交付税や教育振興費によって各地の学びを下支えしている。私が科学教室に参加できたのも、こうした仕組みがあったからだ。教育に投じられる税は、みんなの可能性を拡大して見えるようにする顕微鏡のようなものだ。

教育が未来を育てる一方で、税は暮らしを守る役割も果たす。能登半島地震

©J-FLEC2025

のとき、祖母の家が被災した。瓦屋根は崩れ、断水で生活はままならなかった。片付けに訪れた私は、青いシートに覆われた屋根や列をなす給水車を目にした。道路の応急工事、仮設住宅の整備、上下水道の復旧。そのすべてが、個人の力ではどうにもならない規模の営みだった。復旧費用は国と地方の予備費や交付税措置によって賄われている。かつて東日本大震災後には「復興特別所得税」や「復興特別法人税」が導入され、全国民で痛みを分かち合った。税は社会のリスクに対する保険でもあると、私はその場で実感した。

大規模な災害には行政の力が欠かせないが日常の小さな困難には地域の協働が大切になる。私は地域のＮＰＯが運営する子ども食堂に参加している。夕方になると子どもたちが集まり、温かいご飯を一緒に食べる。食卓を囲みながら宿題を見たり、わからない問題を一緒に考えたりする。ある子が「私って意外とできる子かも」と笑ったとき、胸の奥で何かが響いた。この子ども食堂は、地域の寄付やボランティアに支えられているだけでなく、自治体からの助成金によって成り立っている。つまりここでは、ＮＰＯと自治体が協働し、税金が間接的に子どもの居場所を支えている。私は現場に関わる中で、その仕組みの大切さを肌で知った。

しかし同時に、地域ごとにどんな団体がどのような取り組みをしているのかが見えにくく、せっかくの資源が十分に結びつかない場面も多いと感じた。そこで現在、私はＮＰＯ・行政・民間企業の活動内容を整理し、互いに協働できそうな相手へ直接つながれるプラットホームづくりに取り組んでいる。市とも話し合いを重ね、少しずつ形にしている。多様な主体が互いの力を知り、必要なときに迷わず手を取り合える仕組みを目指している。行政は公共の基盤を整える力を持ち、ＮＰＯや民間の柔軟さは地域のニーズに即応できる。両者が補い合うことで、より「ピントの合った支援」が可能になるだろう。

そして忘れてはならないのが、情報発信の力だ。私の科学教室との出会いは偶然だったが、公共事業や教育プログラムの情報がもっと広く届けば、子どもたちにとってそれは必然の出会いになる。税金はただ支出されるだけでなく、未来への入り口を開くものなのだから。

私は理科嫌いのまま大人になるはずだった。けれどあの日、顕微鏡で珪藻をのぞいたことで世界は一変した。今では社会のお金の流れに関心を持ち、自分なりに考えるようになった。そんなことを思いながら、私は晴れやかな気分で

©J-FLEC2025

コンビニで買ったアイスに「1.08」をかける。わずかな消費税が、教育や福祉、災害復興を支える財源となり、未来の像をくっきりと映す顕微鏡の一部になるのだと思えば、支払いの音も少し軽やかに響く。

©J-FLEC2025